

## 好きを楽しむ…

今春の第172回直木賞は伊与原 新さんの『藍を継ぐ海』に決まりました。不幸にして、私はそれまで伊与原さんという作家について、ほとんど知識を持ち合わせていませんでした。しかし、かつては地球惑星科学をめざした大学研究者であったという類い希な経歴を知るに連れて、一層興味が沸いて来ました。早速、作品を手に入れて読みましたが、文章のそこかしこに科学的な知見が織り込まれており、すっきりとした文体に仮説検証型の論理的なレポートを読むような感覚を覚えました。表題作の『藍の継ぐ海』は5つの小品が収録されたもので、岩石学の話のほか、動物学、天文学などのトピックを軸に異なる場所が題材として取り扱われています。科学の諸分野をタテ糸に、全国各地の話題をヨコの糸にして織物ように編み上げた構成になっています。その土地土地のほとんどは、私がこれまでに訪ねたことのある場所ばかりで親近感を覚えました。作者は、辻村 深月さんとのインタビューの中で、大人が好きなことを追いつける姿を見せることが、子どもには必要だと語っています。学校でも学校でも、格好つけてでもそうありたいと思います。

一方、同じ時期に森見さんの『夜行』という小説を読みましたが、こちらも『夜行』と題する銅版画をめぐって、尾道、奥飛騨、津軽、天竜峡、鞍馬と日本の各地で起きる怪奇的な出来事をちりばめた作品になっています。その個々の話の底流に『夜行』という絵があり、最後まで目が離せません。

まったく試みの異なる2つの作品ですが、唯一の共通点は日本の場所ごとを取り扱ったということでしょうか。場所の持つイメージ、インスピレーションが作家たちに、どのような影響を与えたのか尋ねてみたいところです。これらの作品に共通するものとして、西行の次の和歌が取り上げられています。西行は、1190年旧暦2月16日、23歳にして突如出家した人物で、これを今の暦に改めると3月26日だとか。ここでの花は、もちろん桜であり、人々に通奏低音のように流れている移ろう自然とそれに伴って揺れ動く心情なのでしょう。

春風の花を散らすと見る夢は  
さめても胸のさわぐなりけり                      西行

## 参考図書

- 森見 登美彦(2019)『夜行』小学館文庫, 304 頁。  
伊与原 新(2024)『藍を継ぐ海』新潮社, 272 頁。  
文藝春秋(2024)「オール読物」3・4月号, Vol80-No.2, pp.1-104.